

Ⅱ 農林水産省経営局長賞

1	経営改善部門……………	100
2	生産技術革新部門……………	108
3	6次産業化部門……………	112
4	販売革新部門……………	116
5	働き方改革部門……………	120
6	担い手づくり部門……………	122

経営改善部門／経営局長賞

石川県白山市

株式会社 あぐりー石

- ◆地域の信頼を得て担い手と連携し、農地の集積・集約化や団地化を推進
- ◆若手役員の意見を積極的に取り入れ、省力化技術やスマート農機の導入による生産性の向上、週休制の導入による労働環境改善を実現

代 表

新田 義宣

経営規模

115.1ha（水稻80.0ha、大豆25.6ha、大麦9.0ha、ネギ0.5ha）

地域農業の概要

白山市は、石川県の南部中央に位置し、日本三名山の一つ「霊峰白山」を源とする県内最大河川の手取川流域にある。地形的には、手取川右岸の扇状地からなる平野部と、河岸段丘からなる山麓部及び白山山系の山地から構成されている。

豊富な農業用水と大型区画の水田を利用した大規模な水稻経営が営まれ、大規模経営体では、早くから転作作物として大豆が栽培され、近年では水稻、大麦、大豆の2年3作体系が広がっている。

気候は、日本海式気候に属し、特性が顕著に現れる冬期には、北西からの季節風により気温が低く雪の降る日が多くなる。平野部の平均気温は15.0℃、降水量2,402mm、日照時間1,714時間である。

経営の特徴

経営規模の拡大と経営状況を見据え、計画的に農業機械の大型化や乾燥調整施設の整備等の設備投資を行うとともに、けん引式の作業機や水稻の乾田直播や高密度播種育苗、大豆狭畦播種栽培などの省力化技術やスマート農業機器の導入を積極的に行っている。

自社で乾燥調整施設を建設し、主食用米6品種、酒造好適米3品種、米粉用米1品種の計10品種にまで水稻品種を増やしたことで、地元酒蔵への契約出荷や価格動向に応じた卸売業者等の選定等、多様な実需者ニーズに対応した販売が可能となり収益性が向上した。さらに、主食用米については保育園や老人ホーム、地域住民などへの直売も行っており、市場に左右されない販売価格を維持している。

水稻直播や大麦、大豆のは種作業では、汎用性の高いスリップローラーシーダーを導入して省力化を図り、水稻では、は種から移植までの作業時間を5割削減している。

自動操舵システムやドローンの自動運転機能を活用することで、経験の浅い従業員でも高い作業性が実現でき、省力化と技術の高位平準化により、安定生産を可能にしている。

また、若手役員の意見を積極的に経営に取り入れ、労働環境の改善に取り組むことで、従業員全体の労働意欲の向上につながっている。

地域への貢献

地域の生産調整を引き受けるとともに、大麦や大豆の団地化にあたり、地域内の農地の効率的な利用に向けた調整を行っている。また、分散ほ場解消のための調整を代表が中心となってい、農地の集積・集約化を図ることにより、地域全体の作業性の向上にも貢献している。

他の生産者に先駆けて、水稻、大麦、大豆の2年3作の水田フル活用における省力機械化体系を確立し、安定した収量を確保していることから、大規模経営を目指す担い手らの経営モデルとなっている。

経営改善部門／経営局長賞

静岡県三島市

高木 洋

- ◆七草を三島市の特産物にするとともに、県内唯一の産地育成に貢献
- ◆ネギ、ブロッコリー等の露地野菜栽培、規模拡大や農地の集積・集約化、農福連携など多様な労働力確保に取組み、経営の安定化を実現

代 表

高木 洋

経営規模

露地野菜（七草1.5ha、ネギ0.66ha、ブロッコリー2ha）

地域農業の概要

三島市は、神奈川県と接した静岡県東部に位置する。箱根西麓地域は、三島市東部に位置し、箱根山の傾斜を利用して開墾された畑で、野菜作りに適した気温差と、水はけや風通しの良さ、富士山の火山灰土壌で保肥力が良いなど、多くの好条件が重なった地域であり、大根や馬鈴薯などの根菜を中心に、地域ブランド「箱根西麓三島野菜」の産地として定評がある。気候的には、年間平均気温が16.9℃、年間降水量は1,980mmと比較的温暖な気候である。

この地区の畑は、農機具が十分に活用できないほどの急傾斜であったが、基盤整備により緩傾斜を創出し、広い農地が整備された。

経営の特徴

主力品目の「七草」は、1月7日に七草がゆとして食する風習に由来し、販売期間が1週間程度と非常に短い特殊な品目である。

「箱根西麓三島野菜」である『三島七草』は、七草がゆ用のセット商品として販売を開始し、京阪・中京地区といった都市部に鮮度を保ったまま出荷できるという地理的利点があることから、高値で取引されており、三島市は生産量・販売額ともに全国有数の産地となっている。

生産面では、必要量の倍の生産規模を確保することで「欠品を出さない」生産を実現している。出荷しなかった分に関しては、学校給食用として無償提供したり、次期作の緑肥として有効活用している。

需要喚起のため、毎年新聞・テレビ等のメディアを通じたPRを実施し、消費者へ継続的に情報提供している。

主力である七草以外にも、ネギ、ブロッコリー等の露地野菜栽培に取り組むほか、農業機械や施設を積極的に整備したことで、経営の安定化や雇用の確保が可能となっている。また、ネギはスーパーと契約販売をするなど、営業活動や単価の向上に取り組んでいる。さらに、静岡県版GAP認証である「しずおか認証」を取得することで消費者への安心・安全の確保に努めている。

農地バンクによる農地の貸借と、荒廃農地等利活用交付金事業等を活用し、三島市坂地区及び周辺地域で農地の再生・利用を積極的に行い、規模拡大を進めている。また、近隣市町の条件の良い農地へ集約するよう農地確保に努めている。

地域への貢献

新規就農者の育成にも意欲的に取り組み、県立農林環境専門職大学等と連携した農業研修の受入れを行うとともに、若手農業者への助言指導も実施している。

地元小学校の学校給食へ七草を提供し、地元の子供達に「七草を食べる」という伝統文化の継承を促す活動のほか、食育推進のため、近隣幼稚園の農業体験（ジャガイモ掘り）の受入れも実施している。

市内のNPO法人が運営する障害者就労支援事務所に収穫、出荷調整作業を依頼し、延べ130人の障害者の雇用創出に繋げている。継続的な作業依頼により、年々、作業の質も上がっており、ビジネスパートナーとして大変貴重な戦力となっている。

経営改善部門／経営局長賞

山口県山口市

農事組合法人 新西

- ◆干拓地での水田作（水稻・麦・大豆・露地野菜）経営し、夏期作は水稻・大豆、冬期作は麦・露地野菜と土地利用率200%を達成している
- ◆女性が積極的に働ける組織作り、若い世代の参画促進のため就業規則を作成し世代交代を図る

代 表

河村 芳男

経営規模

49.7ha（水稻36.5ha、大豆10.3ha、（麦46.6ha）タマネギ1ha）

地域農業の概要

山口市名田島地区は、市南部の樫野川流域と周防灘沿岸に広がる干拓地である。干拓は江戸時代から始まり、大正～昭和初期に、名田島地区全体の干拓が行われ、昭和50年代には、水田基盤整備事業が行われ水田汎用化が進んだ。現在、水稻・大豆・麦・野菜とも県内有数の一大生産地となっている。気候は、瀬戸内沿岸気候であり、温暖である。

経営の特徴

山口市南部の干拓地で水田作（水稻・麦・大豆・露地野菜）を経営している。需要に応じた生産販売を進めており、大手酒造メーカーからの契約取引による加工用米（酒造好適米）を生産している。また、小麦は、学校給食等への供給も行っている。

各作物の基本技術の徹底と適期管理により、小麦では571ka/10a（県平均収量の1.4倍）、大豆では245kg/10a（県平均収量の2.4倍）となり、また大麦は出荷量の半数がビール原料となるなど、高い生産実績を上げ、夏季作で水稻、大豆、冬季作で麦・露地野菜の栽培を行い土地利用率は200%に達している。

肥料価格等の高騰に対応し、有機質肥料（鶏糞堆肥等）へ切り替えや、集落営農法人連合体を通じた一括購入等により生産コストの低減を図っている。

また、集落ぐるみでの法人経営を目指しており、各戸の複数組合員化（戸から個へ）を図っている。さらに、女性が積極的に働ける組織づくりを進め、令和3年より理事6名のうち1名を女性理事に、令和6年度より理事8名のうち2名を女性理事とし、経営に女性の意見を反映するように努めている。就業規則の作成や後継世代を常時雇用し中核的人材への育成等、円滑な世代交代を図っている。

地域への貢献

組合員家族を含めての農作業や行事への参加を推奨しており、水田の雑草除去やそうめん流しなどのイベントも開催し、農業への参画促進や豊かな地域づくりへの取組を進めている。

また、山口県では、集落営農法人の経営体質強化を図るため、「集落営農法人連合体」づくりを進めているが、名田島地区でも、7法人連携による（株）アグリ・アシスト名田島が結成され、（農）新西は結成当初から参画し資材の共同購入など生産コストの低減を実現している。

経営改善部門／経営局長賞

大分県豊後高田市

株式会社 真玉キャトルファーム

◆堆肥の散布や稲わら・飼料米といった地域の資源の有効活用を通じて、耕畜連携に積極的に取り組む

◆地域の生産者、食肉卸、小売業者などと協力し独自ブランド「豊後・米仕上牛」を生産

代 表

栗原 勝洋

経営規模

837頭（肥育牛816頭、繁殖牛21頭）

12.0ha（飼料作物 6 ha、水稻 6 ha）

地域農業の概要

豊後高田市は、人口21,785人（令和6年4月末現在）で大分県の北東部、国東半島の西側に位置しており、北は周防灘に面し、豊かな自然と温暖で過ごしやすい瀬戸内式気候に属している。

市内には瀬戸内海国立公園及び国東半島県立自然公園を擁し、山間部及び海岸部の自然景観や農村集落景観、六郷満山文化ゆかりの史跡等、豊かな自然と歴史文化などの地域資源が豊富である。

また、溜池をつないでの稲作、クヌギ林の再生による環境保全と椎茸の栽培などの循環型農業が評価され、平成25年5月に世界農業遺産として認定されている。

米、白ねぎ、畜産を中心に園芸品目（花き、野菜）やそば、椎茸の栽培も盛んであり、なかでも白ねぎは西日本有数、春そばは日本有数の産地となっている。

経営の特徴

徹底したコスト削減とリスク分散のため、粗飼料はすべて自社で収穫しているほか、配合飼料については、指定の配合割合で飼料会社に製造してもらい、北九州の飼料工場まで直接取りに行くことで、輸送コストをも削減している。

仕入れ先は県内2市場（北部・玖珠）のほかに、熊本市場と児湯市場（宮崎）、民間の育成牧場（長崎）と家畜商（愛媛）の6先にそれぞれ10～25%の割合で分散しており、頭数を安定的に確保しつつ、価格変動を抑制しているほか、和牛繁殖による自社調達も行っている。出荷においても大分県畜産公社のほか、福岡食肉市場と人吉食肉センター（熊本）にそれぞれ20～50%の割合で分散しており、それぞれの相場を比較しながら臨機応変

にウェイトを変えている。

10棟の牛舎はすべて安価な木材で建築しており、畜産経営では多額になりがちな設備投資においても安全性を重視し、妥協することなく徹底的に過剰投資を抑制している。経営の良否に与える影響が大きい部分に独自の手法や考え方でアプローチする効果的な取り組みが、飼料高騰下にあっても確実に利益を生み出し、安定した資金繰りを確保する原動力となっており、極めて高い収益性と健全性を備えた類稀な優れた経営を実現している。

地域への貢献

自動攪拌機を2基装備した堆肥施設を建設し、年間3,000トンの品質の高い堆肥を生産し、積極的に堆肥の流通促進に取り組むことで全量を地域の農地に還元している。周辺の白ねぎ農家にとっての貴重な堆肥供給基地として、産地を支える存在となっている。

14haのWCS収穫作業受託のほか、29haで稲わらを収集し、260トンの飼料米を購入するなど、当社が地域において飼料を確保する取り組みが、地域の水田農業を支えることに繋がっている。10aあたり4,000円で稲わらを買収しており、水稻農家の副産物収入にも寄与している。

独自に立ち上げた「豊後・米仕上牛」ブランドが市を代表する畜産ブランドとして、市のPRや、学校給食への定期的な提供を通じた子供たちの食育にも寄与している。さらに、市の特産品である蕎麦とタイアップした「豊後・米仕上牛 肉そば」が郵便局のふるさと小包で商品化されるなど、地域農業のみならず、地域社会の振興にも貢献している。

生産技術革新部門／経営局長賞

新潟県上越市

農事組合法人 高野生産組合

◆主食用米を基本に輸出用米、飼料用米（加工用米）等と大豆の作付け拡大で安定経営を目指す

◆大区画に再整備された圃場と、スマート農業の実証を契機にコスト削減

代 表

関 間 忠 裕

経営規模

水稲66.6ha、大豆3.7ha、たまねぎ0.2ha

地域農業の概要

上越市は新潟県の南西に位置し、県内でも有数の稲作地帯である。稲作単一経営が93%で、農業産出額は184億円であり、作物別の構成比では、米82%、畜産8%、園芸10%と、稲作が主体の地域である。板倉区は上越市南東部に位置する豪雪地帯で、肥沃な重粘土質の土壌のため、市内でも有数の稲作地帯である。

一方で、大豆等の戦略作物の取組も多く、水田転換畑における取組も盛んな地域である。園芸品目では、特にJAが調整・選別施設を整備するなどして、えだまめ生産に力を入れていて、年商1億円を目指している。

経営の特徴

基盤整備完了を契機に、省力・低コスト化に向けたスマート農業の実践を加速させている。持続可能な地域農業を目指し、積極的な資本投入により費用対効果を確保し、経営改善を繰り返しながら事業を効率良く運営をしている。スマート農業の導入・実践により労働時間の削減や作業機の効率的利用によって経営改善されている。

大規模区画を活用した低コスト・高品質型スマート農業一貫体系の確立による経営安定化を目的に、ICT技術やスマート農機を組合せ、より労働生産性が高く効率的な生産に取り組んでいる。また、地域の土壌性質・気候に合致した水稲不耕起V溝直播栽培を取り組むことで、春作業の時間削減や低コスト化を図っている。

複合的な経営による経営の安定化や作期分散等を目的に、大豆やたまねぎ栽培に取り組んでいる。排水対策が重要であることから、水稲栽培のスマート農業一貫体系やV溝乾田直播技術の導入で労力削減されている。

たまねぎの移植栽培は、生育が安定する一方で、育苗に多くの労働時間や資材費が必要

で生産コストが高くなることから、低コスト・省力化を実現すべく「うね上溝底播種＋リン酸種子直下施肥技術」を導入し、収量の向上による安定生産に取り組んでいる。

地域への貢献

ほ場の大区画化や畦畔整備、暗渠の整備などを行い、生産基盤整備等のモデルとして、今後の農業の維持発展に必要な情報や技術を惜しみなく提供し農業の発展に貢献している。

また、将来の地域農業を担ってくれる人材育成のため、地元小学校でスマート農業学習を実施し、実際にスマート農機を体験してもらうことなどを通して、現代農業の実情や過去からの発展について理解を深め、農業の魅力を感じてもらう取組を積極的に行っている。さらに、生産したたまねぎが学校給食で使用され、地場野菜の消費を通じて食育活動の一翼を担っている。

生産技術革新部門／経営局長賞

富山県小矢部市

有限会社 ひかりファーム

◆養液栽培で糖度の高いフルーツトマトを生産し市場競争力を高める

◆独自技術を構築し、「深層水トマト」のブランドを確立

代 表

小倉 豊明

経営規模

0.8ha（トマト0.28ha、桃0.4ha、ブドウ0.1ha）

地域農業の概要

小矢部市は、富山県西部の小矢部川・庄川の扇状地で、砺波平野の北部に位置する水田地帯である。稲作を主体とした水田農業が展開されており、大豆・大麦・はとむぎも生産され、はとむぎ生産量は全国一を誇る。その一方で、施設園芸や露地野菜の生産規模は小さい。12月から3月までは、積雪と低温・低日射の日が多いなど、施設園芸には不利な気象条件である。

経営の特徴

昭和60年のつくば万博で展示されていたトマト栽培に感銘を受けた小倉代表は、平成3年に米作兼業農家として就農後、平成7年に水耕栽培でミニトマト生産を開始してトマトの専業農家となった。平成16年に法人化し、栽培温室により経営規模を拡大した。

市場競争力を高めるため、平成10年にミニトマトから高糖度フルーツトマトに転換した。富山湾の「海洋深層水」を活用した培養液で独自の生産技術を構築し、「深層水トマト」のブランドを確立した。

具体的には、冬季の降雪や夏季の高温など厳しい気象条件下において、大玉の高糖度フルーツトマトの周年的生産体制を構築するため、季節に応じた養液濃度管理や、味と収量を最大化させるための栽植密度を確立するとともに、温湿度・日射量・CO₂濃度などを自動測定する各種センサーを設置し、遠隔モニタリングにより、ハウスサイド自動開閉や細霧冷房による飽差制御などを活用し、施設内環境が最適となるような管理で、多段収穫に取り組んでいる。

地域への貢献

富山県小矢部市内の施設花き・野菜の生産者6名で構成される「小矢部市施設園芸組合」を設立し、会員の情報交換に加え、環境配慮型の機械施設の導入を支援するなど、省エネルギー化、低コスト化を推進している。

また、就農に向けた研修機関である「とやま農業未来カレッジ」の研修生を受け入れたり、県内の高校や中学校で農業の魅力について講演したりするなど新規就農者の確保・育成に貢献している。

さらに、生産したトマトや、その加工品であるトマトジュースは、小矢部市のふるさと納税の返礼品となっているほか、ハウス横に設置した直売所や地元の道の駅で販売されており、地産地消に貢献している。

6次産業化部門／経営局長賞

北海道帯広市

株式会社 十勝加藤牧場

- ◆自社工場で飼育牛の新鮮な生乳を使用した、チーズ、ヨーグルト、アイスクリームなどの乳製品を製造
- ◆菓子メーカーや飲食店など販路拡大し、酪農経営の多角化をすることで、経営の安定化や地域雇用を創出

代 表

加藤 聖壘

経営規模

121ha（牧草58ha、デントコーン41ha、イヤーコーン・大豆22ha）
飼養頭数364頭

地域農業の概要

帯広市は北海道東部に広がる十勝平野のほぼ中央に位置し、恵まれた土地条件を生かして、輪作体系の確立に基づく、小麦、豆類、てん菜、馬鈴しょを主体とした畑作農業や酪農・畜産等による大規模で機械化された土地利用型農業を展開している。

また、畑作4品目に加え、野菜類等の高収益作物の導入や、生産性の向上、コスト低減を図るための取組が進められている。

さらに、近年は、農畜産物の安全・安心への関心の高まりに対応し、地産地消、食育の推進、クリーン農業の実践による環境に配慮した農業の取組等が積極的に行われている。

経営の特徴

十勝加藤牧場では生乳生産を基盤に、ホルスタイン種とジャージー種の2種類を飼育しており、特に希少性が高いジャージー牛の飼育は北海道最大規模である。

自ら生産している新鮮な生乳を使用して、チーズ、ヨーグルト、アイスクリームなどの乳製品を自社加工工場で製造・販売している。製造している乳製品は、安全性にこだわり、徹底した品質管理のもと生産されており、他品種の牛乳に比べて脂肪分が高く、濃厚でクリーミーな味わいが特徴で、顧客より高い評価を得て、菓子メーカーやホテル、飲食店などに販路が拡大し、経営の安定化にも繋がっている。

また、持続可能な農業を目指し、環境に配慮した酪農を实践して、飼料の85%以上を自家生産し、世界情勢や相場に左右されない高品質・安定収穫を目指し、機械化や新技術の導入を進め、高効率化を図っている。自社生産することで、環境負荷を最小限に抑えなが

ら高品質な生乳を生産している。

さらに、女性従業員の積極的な登用や柔軟な働き方の導入など女性が活躍できる環境と機会を提供することにより、より創造的で柔軟な経営が可能となり、競争力が向上した。

地域への貢献

ホルスタイン種とジャージー種 2 品種の牛の飼養、設備機械の自動化の導入、加工品の製造販売など、酪農経営の多角化を進めることで、地域の 6 次産業化のモデルケースとなり、学生や同業者からの見学や研修の希望を多数受け入れることにより、他の酪農家や農業従事者にとっても大きな刺激となっている。

また、雇用を創出することで、地域経済の活性化にも務めている。

6次産業化部門／経営局長賞

新潟県南魚沼市

うおぬま倉友農園 株式会社

- ◆多様な消費者ニーズに合わせ雪室貯蔵や天日乾燥などの商品展開し、直販している
- ◆自社生産米をおにぎりに加工し、直営店を運営することで、収益性と地域雇用を確保

代 表

関 秀俊

経営規模

25ha（水稲23.7ha、そば1.3ha）

地域農業の概要

南魚沼市は、東部を2,000m級の山々と接した自然環境豊かな地域であり、中央部には谷川岳を源流とする魚野川が南北に貫流し、その両側に6,420haの耕地が開けている。

冬は積雪が3mに達する豪雪地のため豊富な雪解け水を農業用水として活用している。周囲を山々に囲まれた盆地で夏は高温多湿で昼夜の寒暖差があることから良食味米の生産に適しており、「魚沼産コシヒカリ」の産地として有名である。また、関東方面の玄関口にあたる立地条件と豊かな食と自然などの地域資源を活かして、都市と農村の交流活動での農業体験やグリーン・ツーリズムなどの取組も活発である。

経営の特徴

うおぬま倉友農園株式会社は、建設業を営む代表が農業の将来性に注目し、興した会社である。代表の祖父が耕作していた田を継承し集落の農業者に委託していたが、高齢によりできなくなったことをきっかけに、平成13年から3haの水稲耕作を始め、平成15年に株式会社化した。

就農当初から、自分で作った米は自分で販売する構想を掲げ、全国各地の物産展に出店し、代表自らが試食販売の販売員として店頭に立ち販売した。その経験を活かし、田んぼ1枚ごとに食味計でおいしさを数値化する等の客観的な裏付けをしながら、食味にこだわった米づくりを実践するとともに、「県特別栽培農産物認証」「天日乾燥」「雪室貯蔵」などの付加価値を付けた販売を行っている。

また、物産展への参加を通じ、おにぎり販売の着想を得て、平成18年に自社生産米を加工・テイクアウト販売する店舗「おにぎり屋」を開店し、さらに収益を伸ばしている。

SNSや口コミ等で評判が広がり、販売を堅実に伸ばし、主軸である米の直接販売と並び、法人全体の4割以上を占める部門にまで成長している。加えて「おにぎり屋」は周年営業

であるため雇用者の冬期の業務確保にも貢献している。

また、おにぎりの購入が契機となり米も購入するといった相乗効果が生まれる等、経営発展の好循環を生む原動力になっている。

地域への貢献

地元小学校の社会見学を受け入れ、地域の子供たちに雪を活用した米の保存方法を学ぶ機会を提供するほか、中高生の職場体験も受け入れており将来の担い手育成に貢献している。また、生産から加工・販売までを行うことで、豪雪地帯においても通年安定した雇用を創出しているほか、従業員のスキルアップのために積極的に研修会に参加する機会を作っている。

スマート農業による環境負荷低減技術の活用や稲わらをはじめ、もみ殻も堆肥化して全量を圃場に還元するほか雪室貯蔵や特別栽培など環境負荷低減にも努めている。

販売革新部門／経営局長賞

新潟県新潟市

株式会社 サンクスファーム黒鳥

- ◆地域ブランド野菜「くろさき茶豆」の中核的な生産・販売者として、えだまめ加工品開発・販売、消費地へのPRを行う
- ◆地域水田農業の受け皿として、水稻の規模拡大と直販を展開

代 表

相田 真平

経営規模

47.3ha（水稻37ha、えだまめ8.5ha、ブロッコリー1.2ha、たまねぎ0.6ha）

地域農業の概要

新潟市西区は、新潟市中心市街地の近郊に位置し、農業生産の中心は新潟砂丘に広がる畑地と旧黒埼町の水田地帯である。

水稻単作経営が多い本県において、西区では複合経営の割合が31%と比較的高く、単一経営の14%を園芸専作経営が占め、比較的園芸が盛んな地域となっている。

黒埼地区の稲作の複合で栽培される園芸品目には、えだまめ、ブロッコリー、カリフラワー、そらまめ、ねぎ、チューリップ等があり、茶豆栽培は、明治末期に始まったと言われ、以来優良系統の選抜と栽培改良が進められ、平成29年4月に「くろさき茶豆」がGIに県内初登録された。

経営の特徴

個別経営体3戸で設立した水稻機械利用組合から発展する形で法人化し、地域を牽引する水稻と園芸の大規模複合経営となった。

地域ブランド野菜「くろさき茶豆」の中核的な生産・販売者として、えだまめの生産を核とする複合経営を展開し、量販店への直接販売をはじめ、加工品開発と販売、消費地へのPRも行っている。

早生から晩生まで8品種を栽培し、6～10月の連続収穫・出荷を行うことで、安定的な生産量を確保し、駅や直売所、自社HP、飲食店等の販路拡大を図っている。

メーカーや試験研究機関と連携し、盆過ぎの余剰えだまめ有効活用に向けて「冷凍えだまめ」を商品化し、メーカーと連携しながら製造し、飲食店等へ販売を進めている。

地域内の福祉事業所と連携し、事業所や障がい者の特性に応じた作業支援を受け入れ、園芸品目の収益向上に繋げている。

地域への貢献

新潟西部担い手協議会が研修機関となって多様な品目の新規就農者の受入体制を整備しており、えだまめ等の栽培研修先として、就農希望者を受け入れるとともに、法人設立当初から、農業大学校の研修や地元高校生のインターンシップ、新潟県農林公社や行政機関・団体の職員研修を積極的に受け入れている。

えだまめ栽培の企業経営化のモデルケースとなり、地域内のえだまめと稲作等の複合経営・大規模化が進み、産地の維持・発展や地域の農業振興に寄与している。また、市街地近郊という立地を生かし、農内外を問わず多様な人材を募集し、地域の雇用創出に貢献している。

販売革新部門／経営局長賞

長崎県南島原市

株式会社 高田牧場

- ◆大規模肥育（一部一貫）経営に家畜商業、精肉卸売業を組合わせた企業的经营を实践
- ◆「雲仙和牛」の商標を取得し、高価格帯から低価格帯まで幅広い牛肉を提供

代 表

高田 紳次

経営規模

1,095頭（繁殖牛175頭、肥育牛920頭）

地域農業の概要

南島原市は長崎県の島原半島南東部に位置し、温暖な気候を活かして、ばれいしょ・トマト・いちご・みかん・アスパラガス等が栽培されており、農業が基幹産業となっている地域である。農家の生産意欲は高く、食の安全・安心への取組みも盛んに行われている。

また、市内における農地の基盤整備が進められており、整備後の農地の有効利用、担い手への集積、遊休農地の解消に取り組んでいる。

経営の特徴

地域でいち早く企業的经营に取り組み、家畜商を組合わせた大規模肥育（一部一貫）経営を行い、県内でも数少ない経営体制を实践している。

飼育する牛は複数の品種（黒毛、褐毛、交雑種等）や肥育方式（一貫、去勢・雌の一般肥育、老廃等）を組み合わせるなど多様な生産方式を实践することで、多彩な肉牛を生産・出荷している。

さらに、子牛の育成から肥育まで適正かつ高度な衛生管理体制のもと生産が行われ、肥育牛出荷の際は生産履歴も添付している。

平成20年に「雲仙和牛」の商標を取得し、高級和牛肉としてブランド化を行い、精肉の卸売りを通じて契約したスーパーや飲食店に高価格帯から低価格帯まで幅広い牛肉の提供を行っている。さらに、契約者とコミュニケーションをとり、実需者ニーズに応じることで信頼を獲得し、販路を拡大した。

また、飼料混合施設を整備し、オカラや焼酎粕、廃菌床などの未利用資源を活用した飼料を調製しコストの低減を図ると共に周辺農家の協力を得て自給飼料の生産に努めている。

地域への貢献

自給飼料生産のために夏季に地域の耕種農家から無償で農地を期間借地し飼料作物を栽培した後、堆肥散布・耕耘して返却している。冬季は耕種農家が野菜を行っており、耕畜連携の取り組みを実践している。

農業大学校生の研修受入や自立を目指す新規就農者の積極的雇用を行い、自立を支援している。

また、子牛の買い支えすることで、地域肉用牛の生産振興に寄与している。

働き方改革部門／経営局長賞

佐賀県嬉野市

吉牟田 太

- ◆クレドミーティング※を実施し、団結して経営目標に向かって進んでいる
 - ◆働く人の物心両面の幸福を追及し、働きやすくやりがいを持って働いてもらえるか常に考え、従業員とともに改善を続ける
- ※行動指針策定に向け、従業員が主体的に議論し、改善や浸透を図るための会議

代 表

吉牟田 太

経営規模

14,680㎡（野菜苗・花苗）

2.11ha（水稲）

地域農業の概要

嬉野市は、佐賀県の南西部に位置し、塩田川、吉田川、鹿島川流域の平坦地域における農業と盆地を含む山麓・山間地における農業とに大別される。

平坦地域では土地利用型農業（米・麦・大豆）を中心に施設・露地野菜との複合経営が主体となり、近年では施設園芸のハウス団地の整備が進んでいる。一方、盆地を含む山麓・山間地では、古くから茶業が盛んにおこなわれており、「うれしの茶」の産地が形成され、稲作との複合経営が営まれている。

経営の特徴

吉牟田氏が代表を務める吉牟田園芸は先代が酪農経営から小ネギ、花苗生産へ転換し、現代表が野菜苗生産を主軸に規模拡大した佐賀県最大の施設園芸経営体である。

作業に関しては「作業マニュアルの作成」により、各品目の生育状況に応じ、栽培管理に対応できるようになり、新しく入った従業員やパート従業員も、一連の作業の流れをスムーズに理解できるようになった。さらに従業員の理解度も深まり、苗品質のバラつきがなくなり、良質苗の安定生産につながっている。

「生産管理システムの導入」により、作業遅れが生じないようになった。また、野菜関係では接ぎ木苗生産も行っており、接ぎ木本数などを示した週間計画を作成し、共有することで、作業の全体像が見える化できている。1日の作業が明確化され、昼礼時に進捗状況の確認を行い、終礼時に翌日の作業と人材配置の確認を行うことで、翌朝スムーズに作業を開始できるようになった。

「従業員の育成」については、各ハウスの作業リーダーを設定したことで、相談・確認が素早くなり、正確かつ効率的な作業を可能にしている。

また、4つの委員会体制を整備して全従業員が委員会に所属することで、コミュニケーションをとりつつ責任をもって行動できるような仕組みづくりを実施した。さらに、各リーダーを中心にクレド作成のためのプロジェクトチームを作り、クレドミーティングを実施することで、行動指針を策定した。

クレドミーティングの実施により、従業員の責任感が芽生え、実現のために必要な行動指針を自分たちで協議してもらうことにつながっており、団結して経営目標に向かって進んでいる。さらにこの活動を通して、従業員に求めることは何かについて意見交換ができ、資質向上に繋がっている。この委員会やクレドミーティングの実施、朝礼時のGood & Newの実施により、従業員のコミュニケーションが取りやすくなり、お互いの価値観を認め合って、より働きやすく、働き甲斐のある職場へと改善されている。

地域への貢献

JA さがからの委託を受け、県育成のイチゴ品種である「さがほのか」および「いちごさん」の原種生産を担っている。健全な苗を県内イチゴ農家への安定供給し、佐賀県のイチゴブランドの確立に大きく貢献するとともに、佐賀県内のイチゴ生産の礎となっている。

また、県内にはイチゴ以外にもトマトやキュウリのトレーニングファームも設置されており、毎年数名の新規就農者がいる。吉牟田氏がトマトとキュウリ育苗で必要な接ぎ木苗技術を就農前に習得し、健全苗の供給を新規就農者や県内のトマトやキュウリ農家にすることで、安定した営農に貢献し、多くの農業者の経営を支えている。

さらに、自ら中心となり、JA さが花苗部会員に対し、この接ぎ木苗の技術研修を行うなど、普及を図った。このような取組により、他の苗経営者も接ぎ木苗の生産導入による経営の安定化が図られており、自分の経営はもとより、周囲の農業者とともに経営発展することで、地域農業の活性化に貢献している。

担い手づくり部門／経営局長賞

新潟県小千谷市

有限会社 農園ビギン

- ◆やりがいと責任を持たせるための従業員の部門担当制導入と経営参画
- ◆宿泊可能な部屋を事務所内に整備し、就農希望者や農業大学校、大学生の研修等、年間5～7人を受入れる

代 表

南雲 信幸

経営規模

28.0ha（水稻）

2.9ha（さつまいも0.8ha、すいか0.6ha、メロン0.4ha、カリフラワー0.8ha、ねぎ0.3ha）

地域農業の概要

小千谷市北部の越路原と小栗田原の間にある東向きの緩傾斜地帯で、水田と園芸農業が盛んな地域。園芸では、すいか、メロン、カリフラワーが栽培されている。

2月には畑地と豪雪を活かして「山谷・坪野ほんやら洞（かまくら）まつり」が開かれ、住民総出で雪原にほんやら洞を作っろうそくをともし、幻想的な風景に地区内外から多くの人が集まる。

経営の特徴

中山間地域で、小～中規模区画ほ場、消費地も遠い等、限られた資源の中で最大限の農業経営を展開している。

多角化・複合化の取組により、夏期の農産物生産と冬期のさつまいも加工・販売で、豪雪地域ながら周年農業を実現。比較的労力に余裕がある冬期の売上げ確保を図っている。

魚沼産コシヒカリの産地でありながら早くから「わたぼうし」、「こがねもち」といったもち品種の栽培に取り組み、コシヒカリ以外の品種で売上げを確保するとともに、収穫作業を分散することで過剰な機械装備を避け生産コスト削減に取り組んできた。米の販路も独自に開拓し確保することで、一般的な米相場に左右されない有利な条件での販売を行っている。

製菓会社と連携し「魚沼産わたぼうし」を総菜としての「おこわ」や「ちまち」を開発。小千谷市の特産品として販売し、地域農業者とも連携し作付拡大や所得確保につなげるための活動を行っている。

社長の人柄と経営理念に惹かれた若者が多く就業しており定着率も高い。これまでに多

くの研修生も受け入れており、さらに研修生2名・従業員1名が独立して就農・開業を行っている。

県農業大学校をはじめとして長年に渡り研修受入を行っており、これまでに延べ50人程度を受け入れ、多くの農業人材の輩出に貢献している。

地域への貢献

法人設立のねらいは雇用と他産業並みの社会保険制度の導入で、現在、従業員8名を確保し地域の重要な雇用の場となっている。

従業員は8人中3名が女性で、水稻中心の法人としては女性の割合が高く、性別に関係なく本人の能力とやる気を重視して採用を行い、さらに役員への登用も図っている。

地域の保育園、小中学校、福祉事業所、県内外の大学等から研修や農業体験の場等として頼りにされており、社会への貢献度が高い。

また会社内にとどまらず、平成26年に「小千谷市農業活性化協議会」発足。地域のやる気のある農業者を集め、最新の農業情勢の情報の共有化、調査・研究の場、交流の場、市長への提言など地域の農業者の発展や連携を図るなど地域リーダーとしての役割発揮も行っている。

